





日本現代文學全集・講談社版 62

---

豐島與志雄  
岸田國士 集  
芹澤光治良

日本現代文學全集

62

豐島與志雄・岸田國士・芹澤光治良集

編 集

伊藤 整  
龜井勝一郎  
中村 光夫  
平野 謙吉  
山本 健吉



昭和41年11月10日 印刷  
昭和41年11月19日 發行

定 價 600圓

© KODANSHA 1966

著 者

お 雄 士 良  
か 雄 士 良  
し 志 國 治  
し 志 國 治  
よ 與 國 治  
よ 與 國 治  
し ま 島 田 光  
し ま 島 田 光  
よ 豐 岸 芹  
よ 豐 岸 芹

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽町3-19  
電話東京(942)1111(大代表)  
振替東京3930

印 刷 大 日 本 印 刷 株 式 會 社  
寫 版 製 株 式 會 社 興 陽 社  
製 本 株 式 會 社 大 進 堂  
製 兩 株 式 會 社 岡 山 紙 器 所  
背 革 株 式 會 社 第 一 紙 藝 社  
表 紙 ク ロ ス 株 式 會 社 石 井  
口 繪 用 紙 日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社  
本 文 用 紙 日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社  
函 貼 用 紙 本 州 製 紙 株 式 會 社  
見 返 し 用 紙 安 倍 川 工 業 株 式 會 社  
扉 用 紙 三 菱 製 紙 株 式 會 社  
神 崎 製 紙 株 式 會 社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

豊島與志雄集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

野ざらし……………七  
人間繁榮……………三  
道化役……………六  
白い朝……………六  
秦の憂愁……………一〇一  
沼のほとり……………一〇九  
白 蛾……………一二五

高尾ざんげ……………一三三

どぶろく幻想……………一三〇

作品解説……………淺見 淵 四〇六

豊島與志雄入門……………紅野敏郎 四二三

年 譜……………四二二

参考文献……………四四四

岸田國士集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

古い玩具	一四一
チロルの秋	一六六
牛山ホテル	一七六
歳 月	二〇〇
速水女塾	二三四
女人渴仰	二五三

作品解説……………淺見 淵 〇六

岸田國士入門……………紅野敏郎 〇三

年 譜…………… 〇九

参考文献…………… 四五

芹澤光治良集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

芹澤光治良入門……………紅野敏郎 四三

年譜…………… 四六

參考文獻…………… 四六

愛と死の書……………二七

ブルジョア……………三七

橋の手前……………三七

戦災者……………三八

死者との對話……………三九

作品解説…………… 淺見 淵 四六



豐島與志雄集



# 白 蛾

—— 近代説話 ——

豊島 興志 雄

住居から谷一つ距れた高台の向ふ裾を走る  
有線電車の駅まで、徒歩で約二十分ばかりの  
距離と、三十分ほどかけてゆつくと、岸  
本着平は毎日歩きました。それは通勤の往復  
といふよりは、散歩に似てゐまして、道筋も

# 野ざらし

## 一

「奇體な名前もあるもんですなあ……慾張つた名前ぢやありませんか。」

電車が坂道のカーヴを通り過ぎて、車輪の軋り呻く響きが一寸靜まつた途端に、さういふ言葉がはつきりと聞えた。兩腕を胸に組んで寒さうに——實際夕方から急に冷々としてきた晩だつた——肩をすぼめてゐた佐伯昌作は、取留めのない夢想の中からふと眼を舉げて見ると、印半纏を着た老人の日焼した顔が、髭を剃り込んだ頤をつき出し加減にして、彼の横から斜上の方を指し示してゐた。其處には、車掌と運轉手と二つ並んだ名札の一つに、木和田五重五郎といふ名前が讀まれた。

「私はこれで日本六十餘州を歩き廻つたですが、かういふ名前に出逢つたなあ初めてでさあ。ゴジューゴロー……何とか讀み方があるんでせうが……慾張つた名前ですな。私は七十になりますけどね……。」

そのいやに固執した「慾張つた」のすぐ後へ、七十といふ年齢が突拍子もなく飛出したので、昌作は知らず識らず笑顔ををした。

「八十八といふ名前もあるぢやないか。」

「そいつあ世間にいくらもありませう、ヤソハチといふんでね。」  
「もつと上にゆくと、八百八といふのがあるよ。」

「へえ？ 八百八。」

「そら、伊豫の松山の八百八狸つて有名な奴さ。」

「へえ、なるほど……。」

日本六十餘州を跨にかけたといふその老人は、ただ口先だけで感心しながら、分つたのかわらないのか何れとも知れない顔付で、なほ木和田五重五郎の名札を眺めてゐた。向ふ側にずらりと並んでゐる無關心な男女の顔の二三に、薄らとした微笑が浮んだ。

「何とか讀み方がありますね。まさかゴジューゴローぢやあ……ちよいと通用しぬかあねえかな。」と云つて老人は首を振つた。

「何せえ慾張つた名前ですな。」

日焦けのした顔の皮膚がいやに厚ぼつたくて、酔つてるのか素面なのか見當がつかなかつた。昌作はぼんやりその顔を見つめた。と俄に、ぎいーとブレーキが利いて電車が止つた。入口に先刻から素知らぬ風で向ふ向きに立つてゐた車掌が、大聲に停留場の名を呼んだ。昌作は急な停車にのめりかけた腰をそのままに立ち上つて、「失敬」と口の中で云ひ捨てながら、慌てて電車を降りた。

——さうしたことが、いつもなら佐伯昌作の愉快な氣分を咬る筈なのに、今は却つて、寂寥と云はうか焦躁と云はうか、兎に角或る漠然たる憂鬱を齎したのである。九州の炭坑のことと橋本澤子のことが、同じ重さで天秤の両方にぶら下つてゐた。一寸した心の持ちやうで、その何れかがびんとは飛飛ばされることは分つてゐた。それが恐しかつた。自分の心の持ちやうによつてはなく、どうにもならない實際上の事柄によつて、何れかに勝利を得させたかつた。

先づ九州の炭坑から……そして次に橋本澤子。

さういふ決心が、「木和田五重五郎」のことで妙に沈み込みがちになるのを、彼は強ひて引き立てて、片山積輔の家へ行つてみた。けれど、玄關から勝手馴れた茶の間へ通るうちに、重苦しい憂鬱がすつかり心を鎮してくるのを、彼ははつきり感じた。

「やあ、どうしたい？」

彼の姿を見ると、片山禎輔はいつもの定り文句を機械的に口から出して、長火鉢に伏せてゐた少し酒氣のある顔を擧げた。それから一寸眉根を曇らせた。昌作は黙つて長火鉢の横手に坐つたが、禎輔が何か苛立つてゐること、先刻から苦しい思ひに沈んでゐたこと、宛も何かの中に落込んで出口を求めようとしてゐるらしいこと、などを漠然と感じた。そしてそれが、不思議にもこの自分昌作に關係してゐることのやうな氣がした。彼は次の言葉等待つた。がその言葉は、彼の豫期しない方面へ飛んでいつた。

「君は富士の裾野を旅したことがあるかい？」

「ありません。」と昌作はぼんやり答へた。

「僕は富士の裾野を旅してゐる所を夢に見たよ。そして實際に行つてみたくなつた。富士の……幾つだつたかね……五湖、七湖、八湖……あの幾つかの湖水めぐりつて奴ね、素敵だよ、君。鈴をつけた馬に乗つて、尾花の野原をしゃんしゃんしゃんとやるんだ。……河口湖つてのがあのだらう。その湖畔のホテルに大層な美人が居てね、或る西洋人と……多分フランス人と、夢のやうな而も熱烈な戀に落ちたなんてロマンスもあるさうだよ。山上の湖水と……あまり山上でもないが、海岸に比ぶれば土地はよほど高いんだらう、まあ山上の湖水と云へば云へないこともないね。……ああ、さうさう、君は、山上の湖水なんかはどうして鰻があるか知つてるかい？ 鰻つて奴は、必ず海に卵を産んで、その卵から孵つたのが、川を溯つて内地……と云つちやあ變だが、海に遠い山間の溪流へまでやつて来るんだよ。それが、出口も入口もない山上の湖水にまで、どうして來ると思ふ？ 知らないだらう？ そいつが面白なんだ。何とか云ふ學者の説に依ると、鰻の小さい奴が、まあ幼蟲だね、それが水鳥の足にくつついて山上の湖水まで運ばれるんださうだ。面白いぢやないか。」

聲に曇りはなかつたけれど、その調子は變に空疎で氣が籠つてゐなかつた。と云つて、人を馬鹿にしてるでもないらしかつた。昌

作は何故ともなく氣壓される氣がして、たじつと待つてゐた。禎輔の心が今そんな所にある筈ではなかつた。九州の炭坑に行くか否かの昌作の返答こそ、今晚の問題であるべき筈だつた。昌作はいつもの禎輔の調子からして、顔を見るなりすぐに問題へ觸れられることと豫期してゐた。所が何といふ他愛もない話だつたらう！ 或は高壓的に返答を引出すのを遠慮して、つまらないことに話を外らしながら、切り出されるのを待つつもりかも知れない、まさか、先日まであんなに急きこんでゐたのを忘れたのではあるまい、などと昌作は考へてみた。けれど禎輔の話は、案外深みへはひつていつた。

「いい天氣ぢやないか、この頃は。こんなだと實際に旅に出たくなるね。こなひだ僕は久しぶりで郊外に出てみたよ。……然し、何と云つてももう秋の終りだね。いくら晴々とした日の光でも、云ふに云はれぬ悲愴な冷かさがある。

野ざらしを心に風のしむ身かな

この句を僕は口の中で繰返し繰返し歩いたものだ。」

突然、殆んど瞬間的に、心をつき刺すやうな服付をじろりとまともを受けたのを、昌作は感じた。喫驚して顔を擧げると、禎輔は押つ被せて尋ねかけた。

「君は鮑のところがどうつてものを知つてるかい？」

昌作は知らないといふ顔色をした。

「君のお父さんや僕の親父などが、日本一の旨い料理だと云つて話してきかしたものだ。僕はまだ食つたことはないがね。東海道の何とかいふ邊鄙な驛にあるさうだ。取り立ての鮑をね、いきなり殻をはいで、岩のやうに堅くなつた生身の肉を、大根研子でおろして、とろろにしたものださうだ。……殘酷ぢやないか、君。生身を大根研子でおろされる時の感じは、どんなだらうね。それから、榮螺の毒焼だつて……。」

さうなると、もう一種の述懐ではなくて、何か他意ありさうな攻撃的な語調だつた。昌作は返辭に迷つて、相手の顔をぼんやり見守

つた。顎骨の弱つた四角な顔、わりに小さな眼と低い頭丈な鼻、短く刈り込んだ口髷、顔全體が何處となく間のびしてゐながら、その間のびのしたなかに、強い意力と冷たい皮肉とを湛へてゐた。眉の外れに小さな黒子があつた。昌作の視線は次第にその黒子に集つてきた。その時、殆ど敵意に近い感情が禎輔の顔に漂つた。何かどしりとした言葉が落ちちかかつて來さうなのを、昌作は感じた。

けれど、丁度その時、奥の室から達子が出て來た。

「いらつしやい。」

下唇の心持ち厚い受口から出る、多少切口上めいた語尾のはつきりした言葉で、彼女は昌作を迎へておいて、其處に坐つた。そのために室の中の空氣が一變した。禎輔の顔は俄に無關心な表情になつた。宛も、覗き出しかけた彼の心が再び奥深く引込んだかのやうだつた。妻の前に於ける彼のさういふ態度の變化が、一寸昌作を驚かした。元來禎輔は、深い問題を論じ合つてる熱心な際にも、妻の達子が其處に出ると俄にくつろいだ態度を取る癖があつた。妻をいたはるのか或は妻の手前を繕ろふのか、または、妻を輕蔑してか或は恐れてか、何れともそれは分らないが、兎に角俄に、餘裕のある何喰はぬ態度をするのだつた。その無意識的な癖を昌作は嫌だとは思はなかつた。然しその晩の禎輔の態度は、單なるさういふ癖ばかりではないらしかつた。何かしら意識的な努力の跡が仄見えな。昌作は一寸心を打たれざるを得なかつた。それと共に、今迄禎輔と對坐中、自分が殆んど一言も口を利かなかつたといふことが、ふいに頭に浮んだ。禎輔ばかり口を利かなくて昌作が無言であるといふやうなことは、昌作が少し使ひすぎて餘分な金を貰ひに來るやうな時にでも——（そんな時禎輔は別に小言も云はずに金を出してやつた）——今迄に餘らないことだつた。昌作は變に落着かない心地になつた。然し達子は彼に長く猶豫を與へなかつた。いつもの率直さで尋ねかけた。

「佐伯さん、どうしたの、九州へ行くことにきめて？ それとも行

かないの？」

昌作は初めその問題を豫期してゐたものの、一度禎輔からあらぬ方へ心を引張られた後なので、咄嗟に思ふことが云へなかつた。

「私いろいろ考へてみたけれど、やはり行つた方がよくはなかつて？」と達子は構はず云ひ進んだ。「炭坑と云へば一寸つらいやうだけれど、何も坑の中へはひつて仕事をするのぢやなし、普通の事務員だと云ふから、却つてそんな所で働いた方が面白くないでせうか。月給だつて初めから百五十圓貰へば、云ひ分ないでせう。そんなよい條件はなかなか探したつてあるものですか。坑主の時枝さんが、昔片山のお父さんに世話になつたとかで、片山が無理に頼んだ上のことですから、きつと出来るだけの……破格の待遇に違ひないわよ。手紙にもさう書いてあつたわ、ねえ、あなた。」彼女は禎輔の方をちらと見やつて、また昌作の方へ向き返つた。「そりやあ東京を離れるのは嫌でせうけれど、一時九州の炭坑なんて思ひもよらない處へ行つてみるのも、却つて生活を新たにするのによいかも知れないわ。あなたはいつも、生活を新たにするつて、口癖のやうに云つてたぢやないの。」

「ええ、さういふ氣持は常にありますが……。」と昌作は漸く口を開いた。「兎に角、生活を新たにするには、それだけの……軸が、心棒が必要なんです。それを探して廻つてるんです。所が生活を立て直す心棒なんてものは……。」

「冗談ぢやないわよ。」と達子は彼を遮つた。「今はそんな議論の場合ぢやないわ。九州へ行くか行かないかの問題ぢやありませんか。行くのが却つてその心棒とかになりはしないかと、私は云つただけよ。……どうするの、行つて？ それとも行かないの？」

「さうですわ……どうしたもんぢやせう？」

「あら、あなたはまだ決めてゐないのね。でも今晚、行くか行かないかの返事をする約束ぢやなかつたの？」

「そのつもりでしたが、もつと詳しく聞いてからでないか……。」

「聞くつて、どんなことを？ もうちやんと分つてるぢやありませんか。」

勿論大概のことは分つてゐた。片山の知人の時枝といふ坑主が、片山の頼みで、佐伯昌作を事務員に使つてみようといふことになり、而も百五十圓といふ破格の月給をくれて、なほ本人の手腕によつては追々引立ててやるとのことだつた。その炭坑は北九州でも可なり大きい方のもので、他に事務員も澤山居るから、初めは見習<sup>かまど</sup>と遊んでゐてもよいといふ、寛大すぎる條件までついてゐた。然しさういふ餘りに結構な事柄こそ、却つて昌作を躊躇せしめたのである。

「然し私には、餘りよい條件だから却つて、變な氣がするんです。」

「それは炭坑のことですもの。」と達子は譚なく云つてのけた。「百五十圓やそこいら出して一人の人を遊ばしといつて、何でもないんでせう。それに、時枝さんの方では、片山からの頼みだから、片山のお父さんへの恩返しつて氣持もあるんでせうから。」

「一體、九州の直方つて、どんな土地でせう？」

「そりやあ君、山があつて、そして朱樂といふ大きな蜜柑が出来る處さ。」と突然禎輔は冗談のやうに云つた。「僕も一度あの朱樂のなつてる所を見た氣がするね。いつか時枝君が送つてくれたのなんか素敵だつたよ。綿を堅めたやうな眞白な厚い皮の中から、薄紫の實が飛出してくるんだからね。たしか君も食べたらう？」

「ええ、あいつは旨かつたですね。」

「僕はね、あの種を少し庭の隅に蒔いたものさ。所が折角芽を出す」と、女中が草と一緒に引つて抜らちまつた。

「そんなことはどうだつていいぢやありませんか。」と達子は急に苛立つてきた。「行くとか行かないとか、一應の返事を時枝さんへ出しておかなければならないと、あなたはあんなに氣を揉んでゐられたぢやありませんか。向ふで好意から取計つて下さるのを、餘り長く放つておいては、ほんとに濟みませんわ。……佐伯さんだつて

あんまり我儘よ。今晚どちらかの返事をする約束しておいて、まだ元のままのあやふやな氣持なんですもの。そんなことぢや、いつになつてもきまりつこないわよ。私いろいろ考へた上で、屹度あなたが行らつしやるものだと思つたものだから、もうお個別の品まで考へていたのよ。襦袢や襟衣や足袋や……そんなもので、かうしてああしてと考へていたのよ。それなのに……。私もう知らないから、勝手になさるがいいわ。」

「そんなことを云つたつて」と禎輔が引取つて云つた。「佐伯君にもいろいろ都合があるだらうし、さう急に決心がつくものかね。」

昌作は、今度は自分が何とか云はなければならぬ場合だと感じたが、一寸言葉が見出せなかつた。彼の心には再び、何とも知れぬ惑はしいものが被さつてきた。實際先達てから、行くか否かの返事だけなりとも時枝へ出しておかなければならないと、しきりに昌作へ決心を強ひたのは、そして、その晩までに返事すると昌作に約束したのは、禎輔自身だつた。所が今急ぎ込んでるのは達子だけで、禎輔自身はどうでもよいといふ投げやりの態度を取つてるのだつた。その投げやりの態度の底に何かがあるのを、昌作は不安に感じた。殊にこれまで、また今後とも恐らく、自分の親戚として且つ保護者として、そして寛大な眞面目な人格者として、禎輔を尊敬してゐただけに、昌作は猶更それを不安に感じた。

「私は今一寸氣持に引掛つてることがありますから」と昌作は突然云つた。「それが片付くまで……もう四五日、待つて頂けませんでせうか。」

「ああゆつくり考へるがいいよ。今ちやなんでもないが、九州へ行く」と云へば昔では……。」

何故かそこで禎輔がぶつりと言葉を途切らした。然し昌作はその皮肉な語氣からして、流刑人の行く處だといふやうな意味合を感じた。そして慌てて辯解し初めた。

「いえ、九州だからどうのかうのと云ふんぢやありません。ただ、

自分の氣持に引掛つてゐることがありますので、それを……。」  
 「まあどうでもいいさ。」と頑輔は上から押被せた。「誰にでもいろんな引掛りはあるものだよ。ゆつくり考へ給ひ。時枝君の方へはいやうに云つとくから。」

そして彼は一變して急に眞面目な眼色で、昌作の顔をじつと見つけた。昌作は眼を外らして次の言葉を待った。然し頑輔は何とも云はなかつた。ふいに立上つて柱時計を眺めた。

「もう八時だ。僕は一寸急な用があるから出掛けるよ。ゆつくりしていき給ひ。ぢきに歸るから。」

「何處へいらつしやるの？」と達子が驚いたやうに彼を見上げた。「會社の用で上田君に逢ふことになつてゐるのを忘れてゐた。なに一寸逢ひさへすればいいんだ。」

そして彼は羽織だけを着換へて、無雜作に出かけていつた。玄關で一瞬間立止つて、何やら考へてゐるらしかつた。がそのまま黙つて表へ出た。

昌作は達子の後について茶の間へ戻つたが、何だか急に薄ら寒い氣持になつた。その彼の顔に、達子はじつと眼を据ゑながら云つた。

「どうしたの、ぼんやりして？　そして變な顔をして？」

「片山さんは私に怒つてらつしやるんぢやないでせうか？」

「なぜ？」

達子は眼を丸くした。

「何だかいつもと様子が違つてるやうぢやありませんか。」

「どうして？」

達子の丸い眼には率直な澄んだ輝きがあつた。

「さうでなけりや……。」と昌作は漸く落着いて云つた、「……喧嘩でもなすつたんですか。」

「まあ！」達子はもう我慢出来ないといふ風に早口で云ひ進んだ。「あなたの方が今日はどうかしてるのよ。いやにひねくれて、夫婦喧嘩をしたかなんて、そんなことを聞く人があるものですか。そり

やあ片山だつて、あなたが餘りあやふやだから、少しは厭氣がさすでせうよ。けれど怒つてなんかあませんわ。また喧嘩なんかもしやしませんわ。」

「いえ私はそんな……云ひ方が悪かつたら御免下さい。ただ何だか片山さんの様子がいつもと違つてるやうだつたものですから……。」

「誰にだつて心配ごとがある時もあるものよ。」と達子は心を和らげて云つた。「會社の方に何かごたごたがあつて、それに頭を使ひすぎなすつてゐるらしいのよ。夜中に眼を覺したり、朝早く起き上つたりなさることが、時々あるものですか、私も少し心配になつて聞いてみると、いくらか神經衰弱らしいと云つて、自分を憐れむやうに微笑んでゐなさるんでせう。自分で微笑みを洩らしてゐる間は、神經衰弱なんて大したことぢやないわよ……。けれど、兎に角さういふ際ですから、あなたも餘り氣をもませないやうに、早くどうにか片をつけたらいいぢやありませんか。」

達子が自分を急ぎ立ててゐるのはその故だなど、昌作はふと考へつた。けれど、頑輔のさうした様子の方へ、彼の心は惹かされた。

頑輔が夜中に眼を覺したり、ふいに朝早く起き上つたりすることが、會社の何かの事件のためではなくて、他に深い原因があるらしいのを、直覺的に彼は感じた。そして我知らず尋ねてみた。

「その他に片山さんの様子が變つたことはありませんか。」

「まあ！……全くあなたの方が今日は變よ。一寸何か云へばすぐ片山を狂人扱ひにして！」

達子からじつと見られてゐる顔を、昌作は伏せてしまつた。心が苦しくなつてきた。黙つてをれなかつた。

「でもあなたは、片山さんがそんなに苦しんでゐらつしやるのに、平氣で落着いてゐられるんですか。」

「あなたはなほ變よ！……私達のことをあなたはよく知つてるぢやありませんか。片山はどんな苦しいことがあつても、その苦しみが過ぎ去るまでは決して人に云はない性質なんでせう。私初めはそ

れを嫌だと思つなければ、馴れてみると、その方がいいやうですわ。なぜつて、考へてもごらんさない、片山がつまらないことに苦しんでる時——苦しみなんでごらんさない、家の中はどうなるでせう？ 二人で陰氣な顔ばかりつき合してたら、堪らないぢやありませんか。苦しみを二重にするばかりですわ。片山も私も、そのことをよく知つてゐるんです。それで片山は、自分に苦しいことがあつても、私には何とも云ひませんし、私はまた、出来るだけ晴々とした顔をして、片山の苦しみを和らげてやるんですよ。でも萬一の場合になつたら、片山の苦しみが餘り大きくなりすぎたら、私にだつて、その苦しみの半分を背負ふだけの覺悟は、ちやんとつてゐますよ。片山もそれはよく知つてゐます。そして私達は互に信頼してゐるわけですよ。」

さういふ二人の生活の調子を、昌作は知らないではなかつた。然しそれは、今彼の心に變な暗い影を投じてゐるものとは、全く無關係な事柄だつた。そして彼は、その暗い影について、その影を投じてくる禎輔のことについて、どう云ひ現はしてよいか、もどかしい思ひのうちに、沈黙してゐた。達子も暫く黙つてゐたが、やがてまた彼を當の問題に引出しかかつた。

「ねえ佐伯さん、もうあなたもいい加減眞面目になつて、自分で生活を立てるやうになさいな。それには、此度のこととは丁度よい機會ぢやありませんか。こんなよい就職口は、また探さうたつてありませんわよ。それは九州なんかに行くのは嫌でせうけれど、それかつて、東京に居てどうするつもりなの。私こんなことを云ふのは嫌だけれど、あなたのお母さんが亡くなられる時、片山のお父さんに預けておかれた財産だつて、もうとつづくに無くなつてるぢやないの。片山はああいふ人ですから、あなたの月々の費用なんか黙つて出してゐますが、そして私が、もう佐伯さんも自分で働いて食べるやうに意見してあげた方がいいつて云ふと、佐伯君も人に意見され

る年頃でもあるまいし、何か考へがあるんだらうなどと、却つてあなたを叱つてはゐますが、それをいいことにして、いつまでものらくらしてゐては、あなたもあんまり冥利につきはしくつて？ 今度是否でも應でも、あなたは暫く九州に行つて辛抱なさるが本當だと、私は心から信じきつてるのよ。片山があんなに骨折つてくれたのをそのままにしておいて、一體あなたはどうするつもりなの？」

「いえ私は、九州行きを斷るつもりぢやないんです。ただ……どうして片山さんが私を九州なんか……」

昌作はしまひまで云ひきれなかつた。達子の眼に突然厳しい光りが現はれたのだつた。そして昌作は、自分の云はうとしてゐることが相手にどう響くかを感じた。達子が腹を立てるのは當然だつた。それは全く忘恩の言葉だつた。然し彼に云はせると、これまであんなに寛大と温情とを以て自分を遇してくれぬ禎輔が、遠い九州の炭坑なんか自分で自分を追ひやらうとすることこそ、最も不可解なのであつた。どうせ就職口を探してくれるのなら、東京もしくは何處かに奔走してくれさうなものだつた。九州の炭坑とは、全く夢にも思ひがけないことだつた。それとも、さういふ處でなければ昌作の生活が眞面目になりはしないといふのなら……それまでのことだけれど。然しそれならそれと、なぜ禎輔は明かに云つてくれなかつたのだから。信念も方向もないぐうたらな生活を送つてる昌作にとつては、九州の炭坑と云へば、全く流刑に等しいと感ぜられるのだつた。そのことを、明敏な禎輔が見落す筈はなかつた。「追つ拂はうとしてるのだ！」としか昌作には思はれなかつた。そしてそれが、今迄凡てを許してくれたる禎輔であるだけに、昌作には不可解に思へるのだつた。本當の心を聞きたい、その上で忍ぶべきなら忍んで九州へ行きたい、といふのが彼の希望の凡てだつた。

達子はふいに叫んだ。

「あなたはそんなに心まで曲つたんですか！」

率直な達子に對しては、昌作は何とも返辭のしやうがなかつた。

「私あなたをそんな人だとは思はなかつた。」と達子は云ひ續けた。「私達があなたのためを思つてやつてゐることを、あなたは、厄介拂ひをする氣で九州なんかへ追ひやるのだと思つてゐるのでせう。いえさうですわ。あなたには人の好意なんものは分らないんです。……これでも私達は、あなたの唯一の味方と思つてゐるんですよ。あなたが珈琲に入りびたつたり、道樂をしたり、ぐづぐづ日を送つたりしてゐるのを、そして牛込の伯父さんにまで見放されたのを……それを私達は、始終好意の眼で見つけてあげたつもりですわ。そしてあなたが自分で云つてたやうに、いつかはあなたの生活が立て直るに違ひないと、ほんとに信じてゐるんですよ。それで片山は東京で方々就職口を内々尋ねて……働くことによつてしか生活はよくならない、佐伯君にとつては仕事を見出すことが第一だ、と片山は云つてゐるのです。私もさう思つてゐます。で、東京にいい口がないので、少し遠いけれど、九州の時枝さんに頼んで上げたのはありませんか。それをあなたは、考へるに事を缺いて、追つ拂ふなんて……！」

昌作は黙つて頭を垂れてゐた。達子の叱責が落ちかかつてくるに隨つて、眼の中が熱くなつてきた。達子の言葉が途切れてから、暫くその續きを待つた後で、少し聲を震はせながら云つた。

「私が悪かつたんです。私は心からあなた方二人に感謝してゐます。けれどもただ、片山さんが何もかも、心の底まで、すつかりのことを云つて下さらないやうな氣がしたんです。それは私の僻みだつたんでせう。……もう何にも申しません。行きませう、九州の炭坑へ。そしてうんと働いてみます。全く私には、仕事を見出すことが第一の……。」

その時、殆んど突然に、いつも遠くを見つめてるやうな橋本澤子の眼が、彼の頭にばかりと浮んだ。瞬間に彼は、或る大きなものに抱きすくめられたやうにも、または行手を塞がれたやうにも感じた。先が云ひ續けられなかつた。

彼の表情の變化に、達子は眼を見張つた。

「佐伯さん、あなた何か……？」と彼女はやがて云つた。

「ええあるんです。」と昌作は吐き出すやうにして云ひ出した。「私を引き留めてゐるものがあるんです。實は私は何にも云はないで、すぐにも承諾して九州へ行きなかつたんです。仰言る通りどの點から考へても、私は九州へ行つた方がいいんです。第一自分で自分に倦き倦きしてゐます。今迄のやうに目的のない生活は、いくら私にでも、さう長く續けられるものではありません。初め片山さんからそのお話を聞きました時、私は何だか新しい生活が自分の前途に開けて來さうな氣がしました。所が行つてみようと思つた瞬間に、急に堪らない淋しさに襲はれたのです。自分でどうにも出來ない淋しさなんです。その時まで私は自分でも知らずにゐましたが、私の心は或るものに囚へられてゐました。その或るものが、私にとつては太陽の光でした。いえ、前から……前からぢやありません。その時からです。東京を離れて九州へ行かうと思つた瞬間からです。そして自分で自分に口實を拵へるために、片山さんの氣持に、あなた方の氣持に、いろんな疑ひを挟んでみたのです。さうです、私は行くのが本當だと知つてゐながら、行かずに濟むやうな口實が欲しかつたのです。いやそればかりぢやありません。九州といふのが餘り思ひがけない土地だつたものですから、淋しさの餘りに、或るものに縋りついたのかも知れません。九州と聞いて、實際島流しにでも達つたやうな氣がして、闇の中へではひつて行くやうな氣がして、そのために光が欲しくなつたのかも知れません。いえ、それよりも寧ろ、前からその光を受けてゐたのが、突然はつきりしてきたのかも知れません。……と云ふよりやはり……。」

云ひかけて彼は急に口を噤んで、暫く室の隅を見つめた。それから一變して、半ば皮肉な半ば自嘲的な調子になつた。

「もう止しませう。そんな詮議立てをしても無益ですから。どつちだつて同じことです。兎に角私は今、率直に云へば、或る女に心を



惹かされてゐるんです。その氣持の上の引掛りが取れるまで、もう四五日、返事を待つて下さいませんか。」

「ちやあ、あなたはやつぱり……。」と達子は叫んだ。

が昌作は云つてしまつてから、非常に不快な氣持になつた。何故だか自分にも分らなかつた。もう何にも云ひたくなかつた。

「それならさうと、初めから仰言ればいいのに。」と達子は云ひ續けてゐた。「私も或はそんなことではないかと薄々感じてはゐたけれど、あなたがあんまり白を切つてるものだから、ついぢめてもみたくなつたのよ。ごらんなさいな、あなたは隠さうたつて隠しきれるものぢやないわ。……で、どんな人なの。その女つていふのは？ ねえ、すつかり云つてごらんなさいな。出来ることなら何とかしてあげますから。片山に云つて悪ければ、云ひはしませんから。え、一體どういふ風になつてるの？」

昌作は彼女の言葉をよく聞いてゐなかつた。何だか自分自身を輕蔑したい、といふだけではまだ足りない氣持だつた。

二人は可なり長い間黙つてゐた。そして昌作は突然云つた。

「いづれあなたには詳しくお話す時が屹度来るやうな氣がします。もう四五日待つて下さい。何もかもそれまでに片をつけますから。」

そして彼はぶつきら棒に立上つた。まだ何か云ひたさうにしてゐる達子から無理に身をもぎ離すやうにして、表へ出て行つた。玄關の薄暗い所で、聲を低めて云つた。

「片山さんには暫く内密にしておいて下さいませんか。」

「ええ、その方がよければ云はないておきませう。……あの、佐伯さん、私もし電話でお呼びしたらすぐに來て下さいよ、屹度ね！」昌作は何故ともなくほろりと涙を落したのだつた。そして達子の最後の言葉は彼の耳に残らなかつた。

霧の深い晩だつた。佐伯昌作は何か追ひ立てられるやうに、柳容堂の二階の喫茶店へ急いだ。

運命と云つたやうなものがぢりぢりと迫つてくるのを、彼は感じたのだつた。そして、達子へ對して四五日の後にと誓つたのは、寧ろ自ら自分の心へ對してだつた。九州の炭坑へ行くべきなのが本當であると、彼ははつきり知つてゐた。片山禎輔の様子に暗い疑惑が生じたにもせよ、そんなことを考慮に入れるのは、自分が餘りに卑怯なからだと思ひたかつた。何にも云はないで、黙つて忍んで行かう！……然しその後から、橋本澤子のことが同じ強さで浮んできた。九州へ行くといふ意志が強くなればなるほど、同じ程度に澤子へ對する愛着が強くなつていつた。九州へなんか行かないでもよいといふ氣になれば、澤子なんかどうでもよいといふ氣になつた。昌作はさういふ自分の心を、どうしていいか分らなかつた。九州の炭坑のことを思ふと、眞暗な氣がした。澤子のことを思ふと、輝かしい氣がした。さういふ闇の暗さと光の明るさどが、同時に、全く正比例して強くなつたり弱くなつたりした。そして、澤子を連れて九州へ行くことは、到底望み得られなかつた。

「兎も角も俺は決心をきめなけりやならないのだ！」

昌作は殆んど絶望的にさう呟いて、清楚とも云へるほど上品な趣味で化粧品類が並べてある店の方をちらりと見やりながら、柳容堂の薄暗い階段を上つて行つた。明るいわりに心持ち狭い二階の室に出ると、彼は俄に眼を伏せて、壁際の小さな圓卓に行つて坐つた。

薄汚れのした古いペーパーの洋酒瓶が兩側にずらりと並んで、眞中に大きな鏡のついでるスタンドの向ふから、きりつと襟を合した澤子の姿が現はれた。彼女は昌作の方をじつと見定めて、眞面目な顔の表情を少しもくづさずに、眼で一吋會釋をしなが、彼の方へ近寄つて來た。彼は眩しいやうな氣持になつた。瞬間に、さうした餘りに初心な自分の心を、自ら恥しくまた意外にも感じて、右手で額の毛を撫で上げながら、恐ろしく口早に云つた。